

現代のことば

岡 真理



ぜん別の、私たちの知らない姿があつた。

イラクにしてもアフガニスタンにしてもパレスチナにして、戦争やテロ、殺戮や破壊が起きたときだけだ。それさえも日常化してしまえば、ほとんど報道されない。それまでにない、より大規模な殺戮や破壊が起きてようやく取り上げられる。そうやって私たちの感性自体がどんどん鈍磨していく。

「中東＝紛争」というイメージだけが固定化し、もはや何が起きても、そうした既知のイメージに回収されてしまう。それは「中東の出来事」であって、「人間の出来事」ではない。

イラクは以後、30年以上におよぶ戦争状態に入する。この子どもたちはその後の30年をどのように生きたのか。生き延びられた者たち、からだの一部を失った者もいるだろう。

マスメディアに代わってフリーライターが、現地の報道で触れるイラクとはぜん

想像してみて、悠久の大河のほとりに群生する棗椰子の林、その葉陰で、愛をささやきあつた恋人たちの姿、水しぶきをあげて河に飛びこむ子どもたちの笑顔、想像してみて、彼らがどんな未来を思い描いていたか……

左京区、出町柳に「かぜのね」というカフェがある。その店の奥にある多目的スペースで9月24日から10日間、「イマジン・ラク展」と題された写真展が開催される。展示されるのは、元エンジニアの吉原茂さんが1970年代後半、赴任先のイラクで撮りためた、30年以上前のイラクの風景とそこに暮らす人々の写真だ。

チグ里斯に静かに沈む夕日、

大河のほとりで紡がれる日々の生活、さんざめく子どもたちの笑い声、春の山々を覆い尽くす夏の浜辺……。私にとって吉原さん

の写真は衝撃だった。そこには、ふだん私たちがメディア

の報道で触れるイラクとはぜん

ここで苦しむ人々の声を届けてくれる。今、そこで起きている悲惨を私たちが知るのは大切なことだし、絶対に必要なことだ。一連の写真は破壊と殺戮を生々しく写した報道写真にも増して、戦争がイラクの人々から何を奪い、彼らの何を破壊したのかを私たちに鮮烈に教えてくれる。

戦争が人間から何を奪い、彼らの大切な何を破壊したのかを私たちが具体的に想像することもできないならば、そこでも悲惨と苦しみの犠牲者であることが、これらの人々のすべてであるかのように。

吉原さんのカメラに向かって微笑む子どもたち。だ

が、その数年後の1980年、無邪気に微笑む子どもたち。だ

唱えられる「戦争反対」も「平和の大切さ」も、単なる抽象的な題目に過ぎないだろう。イラン・イラク戦争が勃発し、

マジンイラク展、それは、もはや取り返しのつかない失われた

過去、平和だった時代に対する素朴な郷愁ではない。私たちがともに想像／創造すべき

「未来の記憶」の姿にほかならぬ。

（京都大教授・現代アラブ文学）